

2018/06/24

## 「神の御声」

よくクリスチャンは、神と出会う、神と交わるという言い方をします。けれど、神は霊ですから、実際に目で見たり、握手をしたりして、交わるわけではありません。神が私たちの霊に語り掛け、霊によって応答するのが、神との交わりです。

ただし、幼児が言葉を覚えるのに個人差があり、人と人とが信頼関係を築くのに個人差があるように、どのようなことを話すのかは個人差があります。霊的に生まれたばかりのクリスチャンは、まず親の声を聞き分けることから始まります。そして、やさしいコミュニケーションから始まって、深いコミュニケーションに至るのです。

神様は、私たちが語り掛けることはどんなことでも聞いてくださり、また、私たち一人一人の成長に合わせて、語り掛けてくださいます。初めは、神様が語り掛けておられる内容がよくわからなくても、あきらめずに聞き続けることが大切です。必ずわかるように教えてくださるからです。そして、毎日少しずつ距離を縮めていくうちに、神様が何を言おうとしているのか、短い時間で理解できるようになっていくものです。

神様との会話は、私たちの霊で聞くものですが、今、神様が私たちに与えてくださっている神の言葉は聖書です。ですから、心で感じた神の御心は、必ず御言葉で確認しましょう。よく「御言葉をいただく」という言い方をしますが、それは、祈って聖書を開き、個人的に、その状況にふさわしい言葉や心に残る言葉を見つけることです。

祈って平安を得た時、慰めや問題解決を求める時、祈りが聞かれた時、必ず聖書を開き、御言葉を求めましょう。その御言葉は、私たちが今後ゆらぐことなく神様を信頼して生きていく大きな支えになります。その御言葉を、正しく解釈できるように、いくつかの原則を確認しましょう。

### 1. 神は罰を与えない

聖書を理解する原則の第一番目は、神は私たちがをさばかない、罰を与えないということです。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。」(ヨハネ 3:16-18)

神が人に罰を与えないのは、死んだ状態で生まれてきた人間を神は助けたいと思っておられるからです。

人は神のいのち(神の霊)をいただいて造られ、本来永遠のいのちを持っていましたが、悪魔にだまされて神の言葉を信じられなくなってしまったので、神との霊的なつながりを失

ってしまいました。それは、永遠のいのちからも切り離された状態になったということであり、それを死んだ状態といいます。「すでにさばかれている」とは、神と分けられているという意味で、罰を与えるとか、責め立てるという意味ではありません。

そうした状態の人間が、生きている間に神を信じなければ、永遠なる神とのつながりを回復できないので、そのまま永遠に滅びることが確定してしまいます。ですから、神を信じない状態のままでは、刑の執行を待っている死刑囚と同じ状態だと言えます。死が確定している人に、神はそれ以上の罰を与えることなどできません。その状態の人に神ができることはただ一つ、死の中から助けることだけです。

このように、人の死は、神とのつながりが切れてしまった結果によるもので、罪を犯した人間への罰ではありません。神は人間を、神のいのちをもって造るほど愛しておられたので、人間が悪魔の仕業で罪を犯してしまったことを深くあわれみ、再び神とつながって永遠のいのちを回復し、私たちが不安の中で生きなくてもよいようにしてくださいました。それが、イエス・キリストの十字架です。

いのちがけで助けておきながら、罰を与えて苦しめるようなことを、神がなさることは絶対にありません。

もし今、私たちが様々なことで苦しんでしまうなら、それは神の罰によるものではなく、むしろ神とのつながりが十分ではないことによるものです。

## 2. 神は良い方であなたに良いことしかしない

「エレミヤは言った。「彼らはあなたを渡しません。どうぞ、主の声、私がおあなたに語っていることに聞き従ってください。そうすれば、あなたはしあわせになり、あなたのいのちは助かるのです。」(エレミヤ 38:20)

これは、エレミヤがゼデキヤ王に言った言葉ですが、神は他の人々の益のために、あなたを犠牲にしようなどとは思いません。神のなさることは、あなたにとって、皆良いことです。また、神は、ご自分の計画を成し遂げるために、あなたを使うのではなく、あなたがあなたらしく生きるために、本来の姿に用いようとされるのです。

全知全能の神は、すべての人にとって益となる道を知っておられ、あなたが最も輝くことのできる本来の姿をご存知です。人はそれを、これまで自分が生きてきたやり方と違う、あるいは、本当にそれでうまくいくのか神が信用できないと言って、拒むことも可能です。しかし、そうすると、結局また同じ苦しみに戻ってきてしまいます。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」(エレミヤ 29:11)

## 《サウルと神様》

「主の霊はサウルを離れ、主からの悪い霊が彼をおびえさせた。」(I サムエル 16:14)

サウルは、神が選んだイスラエルの最初の王様ですが、神の前に罪を犯し、王の任を解かれました。それは、サウルに対する神の罰だったのでしょうか。神は、罪を犯したサウルを見捨てたのでしょうか。

「主の霊はサウルを離れ」とありますが、神が私たちの救いを取り消すことはありません。神は信じる者といつまでも共にいてくださいます。確かにサウルは神の前に罪を犯し、神は次の王を立てておられました。つまり、主の霊がサウルを離れたとは、王としての油注ぎは終わった、神様はサウルを王として扱うことをやめたことを意味するわけです。

また、「主からの悪い霊」とは何でしょうか。神は、私たちに良いことしかなさらないのに、悪い霊を送るはずがありません。ましてや、神様と悪霊が協定を結ぶことなどあり得ませんから、悪霊などではありえません。

原則に則って考えるならば、「神は、サウルに良いものを与えている」ということです。つまり、神様は当然サウルを良い方向に導いておられるのですが、サウルはそれに従いたくないと思っているので、恐れているのです。

私たちもサウルと同じように、御言葉に従いたくない、神の御声を聞きたくないと思ってしまうことがあるのではないのでしょうか。そして、サウルと同じように、恐れや不安を感じたりしていないのでしょうか。そう考えると、神の導きに従いなさい、そうしたらもうおびえなくて生きていけるからと、神が私たちに語っておられるのだと受け止めることができます。これが御言葉を受け取るということです。

### 3. 神は決してあなたを見捨てない

「金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましょう。」

「神のみことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」(ヘブル 13:5-8)

ヘブル 13 章は、「兄弟愛をいつも持っていなさい」という言葉から始まり、主とともに平安に生きるために、私たちが日常心がけることが書かれています。その締めくくりとして、上記の言葉が記されています。

私たちは、初めてイエス・キリストと出会った時、神様が自分を愛していると言っておら

れることを知りました。神が私たちを救ってくださるのは、私たちが何かができるからではなく、むしろ何もできず、自分で自分を救うことができないことを憐れんでのことです。

こうして、私たちが神とのかかわりを取り戻し、救われて永遠のいのちを得て以来、神は共におられます。しかし、自分の中に神の御心に反する思いがある時には、神が共におられると、私たちはどうにも落ち着かなくなってしまう。

こういう時、この世の価値観は、「それじゃ、だめだから、もっと頑張りなさい」と私たちに迫ります。そうすると私たちは、自分はだめだと思って、自分を責めて罪を犯さないように頑張ろうとするか、神と共にいるのがつらくなって、神様と距離を置いてしまうかを選んでしまいがちです。

しかし、神様は決して私たちを見捨てず、いつまでも変わりません。つまり、私たちが何もできない状態のときに憐れんでくださった神は、いつまでも憐れみ続けてくださるのです。たとえ、肉の思いを捨てられなくても、罪から離れられなくても、「主は私の助け手です。」と告白して、神様に助けを乞えばよいのです。

神様は行いによって人を判断しません。神によって選ばれたイスラエル最初の王であるサウル王も、勝手に礼拝してしまったり、神が聖絶するように言った家畜を分捕り品として持ち帰ってしまったり、挙句の果てにそれを礼拝のささげものにしようと考えたり、ずいぶんと神の御心に反するのを行いましたが、サウルがそのような人物であることは、神様は最初からわかっていたはずで、その上で王に任命なさったのです。

私たちは主と共に過ごすだけで、少しずつ変わっていき、また自然と変わることを求めたくなりますから、ただ神から逃げずに憐れを受け取るだけでよいのです。神様はあなたが別の人間になることを望んでいるわけではありません。あなたはそのまま最高に素晴らしいと言って用いてくださるのです。

#### 4. 神の怒りとは

「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる。」と書いてあるとおりです。というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。」

(ローマ 1:16-18)

不敬虔と不正に対して、神の怒りが掲示されるとは、どういうことでしょうか。ローマ人への手紙は、すでに永遠のいのちを持っている、クリスチャンに対して書かれた手紙です。「神の義」とは神の正しさであると同時に、十字架のあがないを受け取り、神との交わりを深めることを指します。救いとは、ただ天国に行けるようになるだけではなく、神様との信頼関係を深めることによって平安を築くことでもあるのです。この素晴らしい知らせが福音で

す。

人は怒ると、すぐ人を裁きます。そのために、神も、怒ると私たちが裁くのだと考えるのは間違いです。怒りの定義にはいろいろありますが、怒りの始まりは、「あれ、自分と違うな」と思うことです。自分がそう感じた時、相手と自分は違っていてもいいということを認めると、相手を裁かずにすみます。この時、「なんで私の思い通りにならないんだ！」と怒ってしまうのは、「私の思い通りになるべきだ」という前提があるからであり、人を裁く行為になるわけです。

ただし、神が私たちに対して、「私と違うな」と思われるということは、私たちが神の御心に反しているということです。神の御心に反してしまうと、私たちは平安がなくなります。そこで、神様は、助けたいと思われるのです。

つまり、この箇所は、すべてのクリスチャンは、神との交わりを深めることによって、イエス様を信じ受け入れる信仰から、イエス様を信頼する信仰へと成長することができるということであり、クリスチャンは神との交わりによって生きるということです。そして、クリスチャンであっても、神との交わりを拒み、神に心を向けない御心に反する人々に対して、神はなんとか助けたいと願っているということが書かれているわけです。

このように、聖書の御言葉を悟ろうとするとき、原則に立ち、神様という方に対して、正しい前提をしっかりと持っているということは、大変助けになります。

この世界は、「もっと頑張っ、もっと良いものになれば、もっと愛される」「今のままではだめだ」というメッセージにあふれています。その前提によって、御言葉を解釈すると、自分で自分を責めてつらくなったり、反対に神から逃げて神と距離を置こうとするようになってしまう。

「あなたがたは、私たちの中で制約を受けているのではなく、自分の心で自分を窮屈にしているのです。私は、自分の子どもに対するように言います。それに報いて、あなたがたのほうでも心を広くしてください。」(Ⅱコリント 6:12-13)

「〇〇でなければだめだ」と自分で自分を追い込まないで、心を広くし、自分自身で御声を聞くことが大切です。聖書を開いて、御言葉をいただき、心に響いた御言葉を正しく解釈することによって、それはあなたの人生を支え、作り変える素晴らしい宝になります。日々、御言葉を自分で受け取って生きましょう。